

ニュージーランド韓国人移民社会調査旅行記

山本かほり

はじめに

ニュージーランドと韓国人?! 多くの人は、この二つの組み合わせを奇妙なものに思うだろう。多くの人が持つこの国のイメージは、「伝統的な英国文化が色濃く残った国」であり、ラグビーの All Blacks によって演じられるハカに見られるような「先住民マオリ人の文化」であろう。およそ、韓国などという東アジアの要素は思いもしない人が多いだろう。

それも当然である。長年、ニュージーランドはヨーロッパ系の人種による国家形成を基本理念としてもっており、1970年代までは排他的な移民政策を続けていた。したがって、アジア系が移民することは事実上不可能だった。そのため、ニュージーランドにアジアの文化が入り込むことなど考えられなかったのである。

しかし、1987年の移民法改正を契機に、ニュージーランド、特に最大都市オークランドの人口構成が大きく変化した。アジア系の移民が急増。その中に、韓国人移住者も多く含まれていたのである。現在、約3万人の韓国人が住んでいて、韓国人コミュニティを形成しているといっているだろう。ニュージーランドの韓国人社会を調査するために、2008年3月8日~3月18日までニュージーランドを訪ねる機会を得た。「まだ、ホッとなうちに紀行文を書きませんか？」

と多文化共生研究所からすすめられた。まだ、十分に資料やデータの整理ができていないが、今回の調査旅行から知り得たことを書いてみようと思う。

私とニュージーランド

本論に入る前に、個人的なニュージーランド体験について述べておくことにしよう。

ニュージーランド (NZ) は私が初めて訪れた外国である。それゆえ、特別な愛着と思い出がある。それは、27年前の1981年のことだ。当時、高校生だった私は英語に強い関心をもっていた。自分の英語力を「みがく」ために、ラジオの講座(『100万人の英語』という番組だったと思う。短波放送だった)で勉強したり、御殿場で行われていた英語キャンプに参加したりしていた。ある日、その英語キャンプの主催者を通じて、NZでの3週間の語学研修とホームステイプログラムを知った。「是非、行きたい!!」と思った。決して安くはなかった参加費を親に頼みこんで出してもらい、参加した。私は16歳、高校2年生だった。

ホームステイ先は、典型的な upper middle class の白人家庭。私と同年の娘を筆頭に4人の子どもがいた。NZの最大都市オークランドのダウンタウンからさほど離れていない閑静な住宅街に家はあった。美しい町並み、手入れされた芝生と庭の花、

大きくて広いキッチン、リビングの暖炉、お父さんのウィットにとんだ会話、お母さんの刺繍（のちに、ビジネスとなり、かなりの財産を産みだした！）など、全てが映画やテレビで見ながら、当時の私が憧れていたものだった。

また、“English more than England”（英国よりも英国的）と言われるだけあって、何となく保守的で伝統的な雰囲気もあった。当時、ホームステイ先の娘たちはジーンズをはくことが許されていなかった。「なぜ？」という私の問いに、お母さんの答えは「cheap な感じがする」だった。しかし、それさえも、何となく「かっこいい」と思ったことを正直に告白しておこう。私は単純だったのだ。

マジョリティである白人、しかも中産層の人たちの生活が、私にとっての NZ 人の生活だった。おそらく、NZ に住む人、みながそういう暮らしをしていると思っていたのだと思う。町を歩けば、当然、先住民であるマオリ人たちにも出会ったし、南太平洋諸島出身の人々ともすれちがった。また、私たちと同じような顔をしたアジア系（一括して Chinese と呼ばれていたが、おそらくほとんどが中国系であったことは間違いない）の人たちともすれちがっていた。しかし、そうした人たちが、NZ でどのような生活をしているのかということには、何の関心も抱かなかった。

ともかく、私はホームステイ先でよく受け入れてもらえ、本当に思い出深い 3 週間を過ごした。NZ の豊かな自然、オークランドの市内に残された広大な公園、丘などにすっかり魅了され、「この国に住みたい。どうすれば住めるのかな？」とも考えたりし

た。しかし、高校生だった私には「留学」程度しか思い浮かばなかった。一時は、本気で NZ 留学について調べたりもしていたが、実際には無難に日本の大学に進学する道を選択したので、NZ に住むことは実現しなかった。当然のことながら、当時は、NZ の移民政策を調べたりすることなど考えも及ばなかった。

しかし、私と Jones 一家との交流が続き、その後、何度か旅行で NZ を訪問した。2 回目が 1985 年の 3 月、3 回目は 1988 年の 10 月だったと思う。この時まで、私の NZ の印象は初回と変わらない。白人社会で、ヨーロッパ的な生活態度・様式を維持した社会。16 歳だった私が単純に「憧れ」を感じた国だった。

変化

「あれ！？」と思ったのは、4 回目の訪問時だ。2000 年 1 月、すでに愛知県立大学に赴任して 3 年が過ぎようとしていた。雑用に追われ、忙しかったので、気分転換に思い出の国へ行きたい、久しぶりに Jones 一家とも再会したいと思って出かけたのである。3 回目の訪問から 12 年が経っていたが、休暇をとっての旅行だったので、ニュージーランドの現状について、事前に何かを調べていくということもしなかった。夫も同行したので、飛行機とホテルだけを予約して、ガイドブックも持たずに出かけた。

オークランドに着いて、驚いた。どう表現すればいいのだろうか。「アジア化」したとでもいえばいいのだろうか。アジア系の顔をした人の数が明らかに増えているのがわかった。メインストリートであるクイーン

ズストリートにはさまざまなアジア系の食堂がならんでいる。特に、町のあちらこちらにハンゲルの看板があり、韓国人が多いのも一目瞭然だった。

1990年代の半ば頃、韓国の主要新聞にNZ移民説明会の広告がよく載っていたことを思い出した。NZに移民してきたのだろうか？と思った。そこで、ホテルの隣にあった小さなスーパーのおじさんに韓国語で尋ねてみた。「いつ、NZにいらしたんですか？」「1995年」「NZに韓国人は多いんですか？」「ああ、いっぱいだよ。僕が来た前後から、移民でたくさんやってきた」「ここでの生活はいかがですか？」「生活してみたら、どこも同じだね。韓国もNZもそれぞれに食べて生きていくのは大変さ。」

Jones家のお母さんが私たちのために作ってくれる料理に少し飽きたとき、町中にあった韓国料理屋のキムチボックムパップ（チャーハン）は救いだった。夫は8年たった今でも「あれはうまかった」と言う。韓国で食べる味と全く変わらなかった。

「韓国からの人たちのNZでの暮らしはどのようなものだろう？人口400万人程度の国では市場も小さいから、アメリカンドリームのような一攫千金はないだろうし。そもそも、なぜ、NZに移民に来たんだろう？」等々、いくつかの疑問はわいたが、疑問のまま8年が過ぎた。

その8年の間に、私の研究テーマもオールドカマーである在日韓国・朝鮮人からニューカマー外国人であるブラジル人と日本の地域社会の変容へと拡がった。今回、NZに行く機会を得たので、さらに関心を広げて、NZの多民族多文化に関して調べてみよう。（オーストラリアの多文化主義はよく耳

にするけれど、NZは？）特に、韓国語ができる利点を活かして、韓国人移住者に関する予備調査をしてみようと思い立ち、NZオークランドの韓国人社会を訪ねることにしたのである。

統計から：NZの人口構成

2006年の統計 (<http://www.stats.govt.nz/census/census-outputs/default.htm>) から、NZの“culture and identity”に関するものを見てみることにしよう。2006年3月現在のNZの人口は約420万人。うち、白人（ヨーロッパ系ニュージーランド人その他、英国、オランダ、オーストラリアなど）が67.6%をしめる。以下、マオリが14.6%、アジア系9.2%、パシフィック系（サモア、トンガ、フィジー、クックアイランド）6.9%と続く。

アジア系には、Chinese、Indian、Korean、Filipino、Japanese、Sri Lankanなどが含まれている。興味深いのは、2001年の統計と比較して、2006年までの5年間のアジア系の増加率が約50%にもものぼっていることである。国別に見ると、中国が10万人から14万人に、インドが6万人から10万人、韓国が1.9万人から3万人へと増加しているのである。また、この調査は、自分自身のアイデンティティとしてのエスニシティを問うている。つまり、自分の所属エスニシティは何か？というものである。結果、アジア系の人たちの約19%が二つ以上のアイデンティティを選択している。そして、アジア系の人口のうち3分の2がオークランド地区に居住しているという。韓国人に限っても、2.5万人がオークランド地区に

居住しており、残り 5000 人が NZ 内の都市に散住しているという。

元々、人口規模が小さい国であるので、実数は多くはないが、比率にすると相当に高い割合を示す。しかも、オークランドにはほぼ一極集中であるので目立つのだ。

ひとつ、おもしろかったエピソードがある。到着した 3/9 の夕食の席でのこと。Jones 家の長女の息子（14 歳）が「僕のクラスは 24 人が韓国人だよ。一クラス 30 人ちょっとだけ」と話してくれた。彼が通う学校はオークランドグラマースクール。公立の中等教育機関であるが、伝統校であり名門として認識されている。白人たちの評価も高い。それだけに、この話をきいた大人たち全員、少々衝撃をうけたようだ。「あのオークランドグラマーに、韓国人がそんなに多いの??？」と。ただし、後に聞いた話しでは、オークランドグラマースクールは大変大きな学校で、しかも、クラス分けも成績順に行っているそうだ。したがって、トップのクラスには、やはり白人が多く、真ん中あたりのクラスに韓国人学生が集中しているとのことである。

調査初日：ここはソウル？

さて、調査を始めるにあたって、インターネットなどで色々と調べてみたが、日本からでは情報が少ない。ソウル大学の先生に相談したら、オークランド大学の宋滄珠先生を紹介してくれた。彼と連絡をとりあい、彼を通じて、NZ の韓国人社会に入ることが可能になった。

調査初日の 3/10、宋先生の研究室を訪ね、そこで、何人かの人を紹介された。まずは、

その日の午後、NZ 韓人協会を訪ねることにした。オークランドでは最大の韓国人コミュニティ North Shore 地区に事務所はある。ダウンタウンから北へ車で 20 分ほどの距離のところに位置している。典型的な中産層地区だという印象を受けた。教育熱心な韓国人たちが、子どもの学校を考えて、学区もいいこの地区に集まっているのだという説明を受けた。

会長は「移民」という言葉から受けるイメージとは異なる生活を NZ の韓国人は送っているという点を繰り返し強調した。つまり、グローバル化の中で、韓国だけにしがみつくのではなく、世界に出て行かなければならない。その一つの選択肢として NZ があったのだと。「NZ は自然にも恵まれ、天候もよく、また、白人中心社会だから、治安もいい。何よりも英語圏だから、子どもたちにとっても非常に有利だ。work permit 以上のビザをもっていれば、子どもの教育は無料。韓国にいれば、英語の塾で月にたくさんのお金を費やさなければならないけれど、ここでは、そんな必要がない」と NZ を選択した理由を語る。

しかし、このような選択が可能になるには、NZ の移民政策の転換が大前提だ。この点について少しだけ触れておこう。

NZ は、前述の通り 1970 年代までは非常に排他的な移民政策をとっていた。Greif は次のように説明する (Grief, S.W. ed. 1995 *Immigration and national identity in New Zealand: one people, two people, many people?* Dummore Press. p. 39)。

“Our immigration is based firmly on the principle that we are and intend to

remain country of European development. It is inevitably discriminatory against Asians—indeed against all persons who are not wholly European race and colour. Whereas we have done much to encourage immigration from Europe, we do everything to discourage in from Asia”

しかし、世界的な規模で白人主義の修正がせまられたこと、マオリの文化復興運動の高まり、NZ 経済の行き詰まりなど様々な要素が重なり、NZ の移民政策は改正を迫られることになる。

1984 年に政権をとった労働党は思い切った経済改革にのりだし、移民政策も大きく

見直した。1986 年に Immigration Policy Review を発表、経済成長を達成するために技能、資格をもった移民を一般的に受け入れるという方針を打ち出した。これにそって、1987 年に新しい移民法が施行され、NZ が必要とする人材の移民受け入れに焦点をあてた。さらに 1991 年の国民党政権は、学歴、資格、年齢、職歴、NZ での仕事の有無などを点数にしたポイント制を導入した。

このような積極的な改正により、アジア系にも門が開かれ、ポイント制による永住権取得、投資移民、長期事業ビザなど、様々な方法で入国してきたという。1987 年移民法以後 5 年間でアジアからの移民数は 4.2 倍に激増したのである。91 年からのポイント制でさらに基準が明確になり、92 年から 5 年間の移民数は、その前 5 年のさらに 2.6 倍になったという。

これが、韓国人移住者が増加した法制度的な背景である。会長によると、実際のビザ申請に際しては、ソウルや NZ 国内にある移民エージェントを通じて、書類を作成し、各自にあったビザを取得して入国してきたそうだ。移住者の入国は 2005 年頃まで続いたが、近年は移民法が変わり、高い英語能力を要求されるようになったために、非英語圏出身者にとって移民は困難になり、韓国からの入国は減少しているという。

これまで移民してきた者の多くが大卒で、大企業の役職経験者や韓国内でビジネスをしてある程度成功した人だったという。「移民」のイメージにつきものの、いわゆる 3K 労働従事者ではないということも強調していた。実際に韓国人がやっている仕事は、小さな店の経営、モーテルの経営、タクシー運転手、そして学校の清掃権を取得して



코리아タウンの入り口 看板



クイーンズストリートの韓国料理屋。チャジャン（黒い味噌）がチャーハンにかかっている。

学校の清掃をする仕事（結構な収入になるらしい！）が多いそうだ。ただし、必死になって働いているのではなく、ゴルフや釣りを楽しんでいるのだと。「この国では4時になるとみな一斉に退社する。そして、家族との一時を大事にできる。韓国にいるときは、朝から夜遅くまで働きづめだった。生活の余裕があるんだ、この国では。」

このようなおおまかな説明をうけた後、North Shore 地区にあるコリアタウン（といっても、ある一面に韓国人経営の店がならんでいるだけ）に連れて行ってもらった。韓国と変わらない食材が売っているスーパー、肉屋、パン屋、美容院（会長の奥さんが経営）、旅行社など、韓国人移住者を対象にした店が並んでいた。しばらくコリアタウン内を見学したのち、タクシーを呼んで帰路につくことにしたが、来たタクシーの運転手もまた韓国人だった。

考えてみると、この日、宋先生に会って以来、英語はほとんど話さず、韓国語だけで事がすんでしまった。

昼食もオークランド大学からほど近い韓国料理屋で食べたが、店内で英語は一言も聞かれなかった。こんな調子だったので、ふと、NZではなく、ソウルにいるような錯覚をおこしていた。タクシーを降りて、白人の生活圏にもどっていくのが奇妙な感じだった。

韓国人教会

韓国のキリスト教信者の数は非常に多いことはよく知られている。当然のことながら、移住者対象の韓国人教会も、大小様々、市内のあちらこちらに存在している。

私は、宋先生に紹介された2人の韓国人を通じて、二つの教会の礼拝に出席した。両方とも長老派の教会。ひとつは水曜日の夕拝（19：30-21：00）。オークランドの公立学校の講堂を借りての礼拝で、出席者は50名ほどだった。日曜日の礼拝の出席者は200名ほどになるという。二つ目は日曜礼拝（11：00-12：30）。オークランド第三の韓国人居住地区である Handerson 地区にある教会だった。ここは、教会が土地・建物を所有し、300名ほどの人が集まっていた。礼拝は一度にできないので、日曜日は一部・二部と分かれて行っている。

どちらの教会でも、基本的には全て韓国語。英語への通訳はない（聖書の朗読だけが韓国語と英語で行われて）。もちろん、礼拝を守ることが最も大切なことであるが、同時に、教会を通じて、韓国人同士のネットワークを形成していることも感じた。どちらの教会でも、礼拝後、お茶や昼食が用意され、集まった人たちが歓談していた。NZで生活しているとはいえ、多くの人は韓国人社会の中だけで生活は充足している。それだけに、韓国人のネットワークからの情報は貴重なものであろう。教会が重要な情報交換の場になっていることが見受けられた。また、日曜学校を通じて、子どもたちに韓国語の継承を結果として可能にしているようでもあった。

韓国学校

移民した者にとって、大きな問題のひとつは、子どもの教育であろう。移民先の学校になじむことができるのか、そして、学校での勉強その他についていくことができる

のかという心配がまずはおきるであろう。しかし、子どもたちの移民先での生活が長くなるにつれて、次第に、問題は母語・母文化の維持・継承へと変化する。そこで、韓国学校の存在が重要な役割を果たすことになる。私は、NZ 韓人協会会長から、オークランド韓国学校校長・桂先生を紹介され、North Shore にある学校（公立小学校を間借りしている）を訪問した。

オークランド韓国学校は、移住者の子ども（1.5世、2世）たちが「韓国人であることを忘れないことを願って」（学校案内）1995年からNorth Shoreにおいて開設された。当初は、21名の教員と300名の子どもたちでスタートしたとある（学校案内）。

毎週土曜日、9時40分から13時10分まで、3コマ用意され、そこで韓国語、韓国史およびテコンドウやサムルノリなどの韓国文化が教えられる。現在はオークランドに3カ所（North Shore 地区・Handerson 地区・Howick 地区）キャンパスがあり、通学してくる子どもたちは3歳から16歳まで、計800人くらい。教員は70名（経験者を募って採用）ほど、そして、アシスタントとして40名の高校生・大学生がいる。



休憩時間 子どもたちは母親たちの手作りのおやつ（韓国料理）を買って食べる。

学校の最大の目的は、子どもたちのアイデンティティの維持・継承にある。韓国人移民の歴史が15年ほどになる現在、幼少期に家族に連れられてきた子ども、NZで生まれた子ども、またはダブルの子どもたちなど、多様化している。現在は、施設やスタッフの都合で、細かい指導体制が困難ではあるが、多様性に対応した学校づくりが課題になってきているようだ。学校内では英語は禁止、韓国語オンリーが原則であるが、学校教育をNZで受けた子どもたちの言語能力は英語が優位になっている。校長先生は、「休憩時間に学校内を歩いていると、子どもたち同士は英語で話している。私が『あれ、変な言葉が聞こえてきた。私には理解できないなあ』と言うと、子どもたちは『何にも言っていないよ』なんて、あわてて言う。でも、英語を禁止すると、何もしゃべらなくなる子どもたちも段々増えている。親たち、特に母親たちに、韓国語を維持・継承することがいかに大事かを教育する時期にきている」と語る。

休憩時間に何人かの子どもたちと話したが、日常会話程度ならば、問題なく韓国語で通じた。「学校、楽しい?」「はい」「韓国語と英語とどっちが上手?」「二つとも同じくらい」「ここで生まれたの?」「はい」「でも、お家では全部韓国語?」「そう。お父さんやお母さんには英語は通じないから。」

校内を見学しながら「アンニョン！（こんにちは）」と子どもたちに声をかけると、丁寧にお辞儀をしながら「アンニョンハセヨ」と答える子どもたちのかわいい姿、それをみて、「ああ、ちゃんと挨拶ができるね」とほめる先生の姿が印象に残った。

調査の感想を若干：韓国人社会と Jones 家の往復で考えたこと

さて、このエッセイを終えるにあたって、韓国人社会と白人家庭の Jones 家の往復から感じたことを若干述べておこう。

今回の旅行中、私は Jones 家に泊めてもらった。11 年前に引っ越し、今は Mission Bay というやはり upper middle class 地域に住んでいる。メールで「3月に再訪しようと思います。今回は休暇ではなく、調査でオークランドに行きます。予定はそちらに到着してからはっきりすると思いますが、ずっとオークランドに滞在することになると思います」と連絡をいれた。向こうからは「大歓迎！再会を楽しみにしている。家に泊まってね」という返事がきた。

さて、3/9 の昼過ぎ、オークランド空港には Jones 家の長女とお父さんが私を迎えてくれて、車に乗り込んだ。まずは、再会を喜び、お互いの近況を伝えた。その後、2人から「ところで、今回の調査って何？」と聞かれた。ここで、私は答えるのを一瞬躊躇した。調査の内容を知ったら、どう思うだろうか？と思ったからである。かれらは、白人社会の中で暮らしている。海外にも友人が多いが、オーストラリア、イギリスなどかれらの文化圏と非常に近い白人ばかりだ。多分、私が唯一の非白人の友人だろう。遠く日本から来て、短期で帰国していくことが明確な私のことは、いつも歓迎してくれる。「かほりはゲストじゃない。家族だ。いつでもおいで」と言ってくれる。そこに、人種とか国籍の壁は存在していない。しかし、NZ に移民してきて、NZ の永住権や市民権を取得している韓国人（私も含

めて、かれらにとっては Asian という括りしかないが) は、かれらにどううつっているのだろうか？



Jones 家の窓から upper middle class の地域であることは一目瞭然

以前、かれらがマオリ人やパシフィック系の人たちのことを、全く悪気なく、しかし、かなり否定的に語るのを聞いたこともある。オークランド南部の下層地区を通りすぎたときに、「見てよ。庭の手入れもしていない。Islanders (パシフィック系の人たちを差別的なコノテーションをこめて、白人たちはこう呼ぶ。ある韓国人は「NZ だって、Island なのにね」と皮肉っていたが) の家よ。ああ、これは Islanders の店。何でもかんでも売っている典型ね。そして、何となく汚いのよね。」

私は、こうしたコメントには居心地の悪さを感じる。だからこそ、「移民」「エスニシティ」「人種」などに関わる話題を、かれらとするのは面倒だなと思ったのである。意識的に差別しているのではなく無意識だから、かえって、面倒なのだ。日本での在日コリアンとかブラジル人に関わる調査をしていると、調査地域の日本人住民の方から不快感を示されたことが何度もある。かれらが同様の「不快感」をもつかもしれな

いとも思った。

しかし、調査内容について、できる限り丁寧に答えた。かれらの反応は「へえ、そんなに韓国人が住んでいるの？確かに、アジア系の人口は無視できない規模になっている。ただ、英語が下手なのが問題だよ。特に電話になるとひどいね。自分たちだけで固まって、私たちの中に入り込もうとしないのも良くない」というものだった。私は、返事をするのを避けた。そして、やっぱり面倒だなと思った。

10日間の滞在中、オークランドのあちこちに調査ででかけることになった。Jones家のお母さんは、いつも車で送ってくれた。本当にありがたかったし、彼女のサポートなしでは、調査の遂行は困難だった。タクシーをつかっていたら、多額の費用になっただろう。しかし、同時に、彼女のサポートをうけることは、調査の内容を伝えなければならないことを意味し、そのたびごとに、何となく、躊躇した。考え過ぎかもしれない。しかし、やっぱり、Jones家の人々は、upper middle classの白人で、NZ社会のメインストリームを歩いてきた人なのだ。「私たちは決してrichではない。well-offではあったけれど、middle classの生活よ」と強調するが、かれらが、移住者いやマイノリティの生活に思いを寄せることなどないだろう。そもそも、NZ一般の人にとって、immigrantという言葉すら定着していないような印象を受けた。私が“Korean immigrants”という言葉で調査計画を説明しても、どうもピンと来ていないようだった。もちろん、言葉としては知っている。もとをたどれば、自分たちの先祖も英国から移民してきているのだ。しかし、私の話

を聞く表情から、immigrantという言葉が、かれらにとってリアリティをもっていないのではないかというこが見て取れたのである。USAやカナダなどとは違うなあと思った。きっと、かれらは、なぜ、私がNZまで来て韓国人社会を調べるのか疑問だっただろう。

今度は韓国人移住者の話し。「NZでの生活の一番大変なのは英語ですよ。でも、Kiwi（NZ人のこと。ほとんどが白人を意味している）たちとつきあうわけじゃないから。ゴルフなどで会っても、簡単に挨拶するだけ。3つ知っていればことがすむ。“Hi!” “How are you?” “Have a good day!”これだけでいい。Kiwiたちと深い話しができるわけでもないし、所詮、文化が違うのだから。今は韓国テレビもリアルタイムで入ってくるし、インターネットもあるし。それほど遠いところにきている感覚はないですね。」やはり、NZ社会に適応はなかなか困難らしい。

もう一人の移住者の話。彼女は、15年前、32歳の時にNZに来た。若かったこともあり、相対的に英語はうまい。一時は空港の免税店で働き、順調に昇進もしたという。しかし、6年働き、本社に行きたいという希望を出したところで挫折した。「韓国人＝白人ではない」という理由でかなわなかったのだ。「アジア系が最も差別を受けやすいと考えている人が最も多い」という結果が2005年の新聞社の世論調査で出たそうであるが、それを象徴する一つのエピソードであろう（オークランド大学大学院生・韓国人留学生へのインタビュー）。彼女は、その後、「こうならば自分で事業を興すしかない」と考え、移民エージェント、不動産、韓国

人移住者の定着サービスなど様々な事業を経験してきた。「定着サービス」はNZに到着したばかりの韓国人移住者にとりあえずの宿泊施設を紹介し、子どもの学校の手続きをはじめとして、生活が始めることができるように援助する仕事だそうだ。「教会へ連れてくることまで入れてちょうど1週間」だという。彼女は1000ドルでやっていたそうだ。今はオークランド西部にあるショッピングモールで宝石店を経営している。

「移民生活は大変ですよ。24時間、常に緊張状態。移民生活がどんなものか知っていたら、きっと、そのまま韓国にいたでしょうね。私たちは、所詮、韓国人。この国の政策は、根本ではヨーロッパの白人文化を強固に維持しようとしている。これだけ移民を受け入れているのだから、変わらなければいけないことは明らかだけど、変わろうとしない。」そして、さらに続ける。

「子どもたちの将来も問題よね。この国は労働市場が小さいから、大学を出てもなかなか仕事がない。Kiwiだって、オーストラリアなどにどんどん流出している。だから、韓国人移住者の子どもはもっと大変よね。国内で就職するよりも、大学を出ると、その英語力を活かして、韓国に戻って就職しているケースも多いのよ。移民はひとつの手段にすぎないかもね。」

NZの白人、韓国人移住者、両者の話を聞いて感じたこと。両者は空間は共にしているが、実質的には全く別の世界に生きているのだということ。前述の通り、韓国人が多く住んでいる地域は中産層の居住区である。当然、周囲には白人が多い。しかし、両者が交わることはない。子どもたちもそうだという。小学校段階では、子どもたち

は白人たちとも一緒に行動するが、高校にもなると、韓国人同士でつきあうようになるようである。「所詮、文化が違う」という言葉は何度も聞いた。

しかし、まだ韓国人移住者増加の歴史は20年弱だ。これから本格的に1.5世、2世たちが社会に出て行く時期を迎える。子どもたちがNZ社会にどう統合されるのか(またはされないのか)? さらには、2005年以降、実質的に韓国人に対してNZが門を閉じた後、韓人社会がどうなっていくのか? 少しずつでも追究できたらと思っている。

今回の調査旅行はわずか10日間、しかも、とにかく、全てはオークランドに着いてからはじまる! という状態での出発だった。

「日本人とはちがって、韓国人は1週間からの約束はしないのですよ。今、電話して、OKならば約束成立なんです」と宋先生。こうした韓国式の調査は何度も経験しているので、頭ではわかっているが、いつも、ちゃんと調査できるのか不安だ。しかしながら、多くの人の助けがあったおかげで、予想以上に多くの収穫があった。まだ、予備調査の範囲をでないものであるが、NZの韓国人移住者たちの生活がどんなものか、おおまかなイメージをつかむことができたと思う。移住者へのインタビューも数名行うことができたことも大きな収穫だった。

冒頭でも述べた通り、帰国した当日からこのエッセイを書き始めた。データや資料の整理も不十分だ。今後、資料を読み込み、必要な文献を集め、そして、データを整理して、成果を発表したいと考えている。そして、そのことが、日本の「多文化共生社会」の形成に向けての何かのヒントになればと考えている。

著者プロフィール

山本かほり (YAMAMOTO Kaori) 文学部 (社会福祉学科) 准教授 社会学

■略歴：神戸女学院大学文学部英文学科卒業。その後、1年間、静岡県立高校で英語教師を経て、神戸女学院大学文学研究科社会学専攻、(修士課程)、関西大学大学院博士課程、ソウルへの留学を経て、1997年4月愛知県立大学文学部社会福祉学科に赴任

■これまでの主たる研究：修士から博士課程時代は、日韓の狭間に生きる人々を主として研究のテーマにしていた。具体的には、修士論文では、在日2世文学を社会的に分析。博士課程では、ソウルでの調査を通じて在韓日本人妻(植民地時代に朝鮮人男性と結婚。その後、韓国にわたったり、継続して、韓国に住んでいる女性帯)へのインタビュー、共同研究として、在日韓国・朝鮮人の家族親族単位的生活史調査に加わり、かれらの文化変容、日本での生存戦略、そして、エスニシティの継承と断絶に関する研究にたずさわってきた。

■現在の主たる関心：2001年から、地域社会からの要請もあり、愛知県内で急増しているブラジル人住民と日本社会の変化について、関心をもってきた。主たる調査値は西尾市で、ブラジル人がもたらした地域の変容、ブラジル人たちの地域への関わり、日本人住民の意識など、調査を多岐にわたって、おこなってきた。一つの地域から、いかに一般化することができるのかが、当面の課題である。また、2年ほど前からは、韓国に関わる研究にも着手。韓国も「多文化」が国レベルでも、そして、学問レベルでも、ひとつの「流行」になっているが、韓国での「多文化」と日本の「多文化共生」を比較研究することに関心を持っている。同時に韓国人の「ディアスポラ」化にも関心を持っている。1970年からはアメリカや南米への移住、そして、1990年代にはニュージーランド、オーストラリアへの移民が、韓国人の間で盛んになった。とくに、NZなどでの移民生活は、一般的に考える「移民生活」とは異なり、学歴も高く、韓国でも中産層的な生活をしてきた人たちの移民である。そうしたかれらが、「白人」中心社会でどう生きているのか、また、NZ社会がどう変化しているのかに、関心をもちはじめたところである。このエッセイも、10日間にわたるNZオークランドへの予備調査の旅の帰りに書いている。

■共生への考え：異なった文化をもった人が、その文化を顕在化させながら、お互いに生きていくことができることだと、とりあえずは、考えている。日本のケースを考えると、いかにして、共生と統合が共存できるのか、政策レベル、地域レベル、そして、個人の意識レベルで、どうかわっていきべきかを考えているところである。

